

琉球大学学術リポジトリ

子どものモノとのかかわりからみた生活科教育への 一提案

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2018-09-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 由香, 前里, 結子, Matsumoto, Yuka, Maezato, Yuiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42505

子どものモノとのかかわりからみた生活科教育への一提案

松本 由香・前里 結子

An Approach to Teaching in the Life Subject from a Perspective of
Children's Interaction with Living Goods

Yuka MATSUMOTO, Yuiko MAEZATO

I はじめに

(1) 研究目的

小学校低学年で教育される「生活科」は、小学校学習指導要領¹によれば、「児童の具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う」ことを目標とする。具体的には、生活科の内容は、日常生活の中での自然、社会、人、モノ²を広く取り上げ、それらと自分とのかかわり方を学ぶ教科であるといえよう。ここで特に重視されているのが、児童が自立する基礎を学ぶことで、動植物の観察、飼育、交通安全、人とかかわり、遊びなどのことがら、生活科の教科書に取り上げられている。これらの取り上げられることがらを見ると、生活の中のさまざまなモノとのかかわりについては、注目されることはなく、学習指導要領にも記述されていないが、筆者らは、生活の中にある必ず存在するモノとのかかわりについても教育対象にする必要があるのではないかと考える。なぜなら、現代社会で生きる私たちの暮らしは、さまざまなモノに支えられていて、人は実体として存在することから、人は衣服や生活用品、建物など、モノとかかわらざるを得ないからである。それらのモノは、私たちが購入・消費することで、私たちの身の回りに存在する。つまり、人はモノの消費と切っても切れない関係にあり、子どもも、やはり同様の環境にあるといえる。

そこで本研究では、子どものモノへの思い、かかわり方を調査し、その考察から、子どもにとってモノがどのような意味をもつのかを考察し、それをもとに、生活科でのモノとのかかわり方を取り上げる教育的意義について考える。

(2) 研究方法

まず子どもとモノの消費についての文献を収集し、消費社会におけるモノの選択のあり方について考察した。

次に筆者（前里）の出身地、宮古島市内の小学校に通う1~6年生を対象に、モノとのかかわり方についてのアンケート調査を行った。そして小学校教諭に子どもとモノとのかかわり方についての聞き取りを行った。

以上の文献とアンケート調査・聞き取りから総合的に考察を行い、生活科教育でモノを取り上げる教育の意義について明らかにする。

Ⅱ 消費社会におけるモノの選択のあり方

現在、私たちは、「高度消費社会」とよばれる環境で生活している。浅野 [2002:46] は、「高度消費社会とは、商品がその機能よりも記号としての性格を強めていく社会」と説明し、「例えば衣服ならば、寒さをしのぐ、肌を保護するという機能より、どこのブランドで、そのブランドによって表現されるイメージはどのようなもので、といった記号的な特性の方が重視される社会のこと」と述べている。モノを消費する際に、多様な選択肢の中から自由に選ぶことが可能になった現代において、「自由に選択する」という行為は、人々が生活を構築していく上で重要な行為であり、決して切り離せないものである。吉野 [1991:5-6] は、「生活様式のデザインとは、生活を構成するさまざまな要素の取捨選択、組合せ、配置などによって、一つの生活世界をつくり出すこと」と述べ、より良い選択をするためには、生活様式についての深い洞察がなければならないとしている。そこで筆者らは、まず初めに自由に選択するという行為について、その定義を見直し認識しておく必要があると考えた。浅野 [2002:50] は、自由であるための条件は、①選択肢が複数個あるということ、②選ぶ主体がいるということ、の 2 つであるとしている。ここで、②選ぶ主体がいるということ、に関して、必ずしもその選ぶ主体となる人物が、選んだモノを生活に取り込む生活者本人ではないという可能性があることに目を向ける必要がある。例えば、本人以外の誰かが選択にかかわり、本人がまったく選択にかかわっていないとすれば、これは生活者の自由な選択とはいえないはずである。また選ぶ主体は一人だけとは限らず、本人と本人以外の複数人が共に選択するということもあり得る。したがってこの 2 点を②の条件に追記しておく。まとめると、自由であるための条件は、①選択肢が複数個あるということ、②選ぶ主体がいるということ（選ぶ主体とは、次の項目にあてはまる人物とする。つまり a. モノを自身の生活に取り入れる本人であること、また b. その本人を含めた複数人）である。

ここで自由の条件の一つである①選択肢が複数個ある、という環境にはそれぞれで差があるのではないかという視点を持ち、筆者らは、生活における自由の格差について考察してみることにした。現在、社会問題の一つとして格差社会が取り上げられることは少なくない。フランスの経済学者トマ・ピケティは、著書『21 世紀の資本』[2014] の中で、格差社会の仕組みについて明らかにし、格差是正の方法を提唱した。この本は世界的ベストセラーとなり、日本でも話題になった。また日本では、2006 年の新語・流行語大賞に「格差社会」という言葉がトップテン入りを果たしていること [清水 2015:1167] から、格差の問題が以前から大きく意識されている事柄であることは間違いない。しかし格差拡大が指摘される中で、国民の中流意識にはあまり変化がみられないことが、内閣府の「国民生活に関する世論調査」（2015 年 6 月）³ により明らかにされた。この調査項目が設定された 2000 年 12 月、格差社会が意識された 2006 年 10 月の調査結果と比較してみた。すると「中の中」と答えた者の割合は、2000 年では 56.2%、2006 年では 54.1%、2015 年では 56.3% であり、ほぼ同じ割合となっていることがわかった。

格差社会は今後広がっていくと推測されるが、国民の中流意識にはまだ特に変化がないということから、自由の条件の一つである①選択肢が複数個ある、という環境には、現時点でさほど差がないととらえることができるであろう。

ところで、衣服や小物類をはじめとする私たちの身の回りに存在するモノは、生活に必要なモノという側面よりも、個人の感覚を満たす側面があるといえる。したがってモノに対する自分の意識、感じ方が明確でない場合、それがモノとのかかわりかたをうまくコントロールできない要因の一つとなり得るといえる。

富田 [1991:11-12] は「生活文化は、①意識内にあるもの、②行動に現われたもの、③外界の物体に現われたもの、の三つに分類できる。そしてこれら三つが三位一体となって一つの文化を

構成していると考えられる」と述べている。富田 [1991:11-12] は、これについて正月行事を例に説明しているが、この考え方は、もっと身近な、普段の生活行動を説明するのにも充分取り入れられると考えた。そこで筆者は、普段の衣生活に関する一連の流れに焦点を当て、**図1**にまとめた。

①の意識内にあるものを、**①**何を考えていたのか、**②**の行動に表れたものを、**②**着るモノを選択する、**③**の外界の物体に現われたものを**③**実際に着ているモノ、として、それぞれ当てはめた。小林 [1989:163] は、「被服の表現行動は、被服の選択行動や着装行動と深いかかわりをもっている」と述べており、この文章中に出てくる三つの要素と重なるのではないかと考えた。すると、被服の表現行動—③、被服の選択行動—①、被服の着装行動—②、というように位置づけることができた。さらにこの三つの事柄が深いかかわりをもっている、としている点も、富田 [1991:11-12] の「三位一体」という考えと一致している部分の一つであった。以上のことから、生活文化に関する考え方を、衣服や持ち物などに関する生活行動に置き換えることに問題はないと考え、**図1**にまとめた。

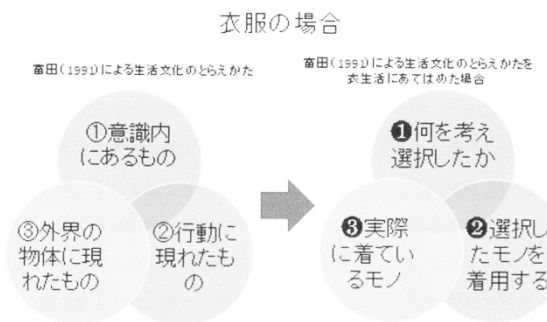


図1 生活文化と衣生活行動のとらえ方

次に、**図1**を参考に、自己とモノの関係について考える。毎日の生活を営んでいく上で、「考える→行動に移す→決定する」という行為は繰り返し行われる。そして、考えと行動・決定の間にギャップが生じる時、個人とモノとのかかわり方がうまく作用していないといえるのではないかと筆者らは考えた。例えば、この洋服はあまり好きではないと考えていても、他人の意見にしたがって着用してしまう場合、**③**外界の物体に現われたもの、は、それを通して**①**意識内にあるものを十分に補えていないということになる。このずれが、良い気持ちで生活のスタートを切れなかったり、モノを粗末に扱うといった結果を招くこともあるのではないだろうか。次項のアンケート調査では、この視点をもとに、考えと選択行動間のずれについての実態を把握することにする。

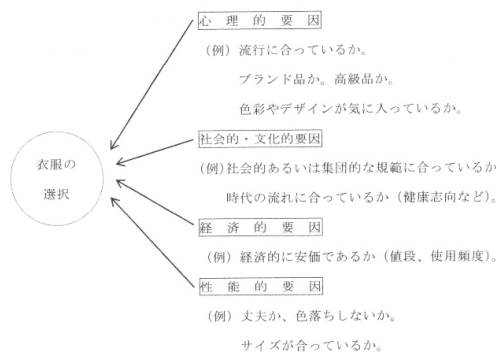


図2 被服の選択行動の要因 [小林 1989:163]

小林[1989:163]は、衣服の選択について「毎日何気なく行っている被服の選択や着装行動には、いろいろの要因が関与している」として、図 2 を示した。この 4 つの選択行動の要因のうち、心理的要因に焦点を当てて、子どもとモノとのかかわり方の実態を明らかにしていく。

Ⅲ 考察

(1) 子どもへのアンケート調査とその結果

1) 調査目的

現在、多くの人々が、自分自身とモノとのつきあい方について見直し始めている。日本では、『フランス人は 10 着しか服をもたない』[ジェニファー・L・スコット:2014]というタイトルの本が、61 万部を超えるベストセラーとなり、その内容が多くの人に注目された。他にも、不要なモノを捨て、整理するという意味の「断捨離」について書かれた雑誌や書籍を書店で目にする機会が多い。これらのことから、モノが多くあふれる現代においてどのようにモノとつきあうべきか、本当に自分にとって必要なモノとは何か、ということの人々が改めて意識し始め、またその答えを求めているということができる。このようにモノとのかかわり方について学ぼうとしている人が多いことについて、今まで人々が自分とかかわりのあるモノ一つ一つについて、そのかかわり方についてそれほど意識してこなかったことがあるのではないかと考えた。このことから、アンケート調査を通して、子どもがモノに対してどのような意識をもちながら生活しているのかについて考察する。また教師に対して、子どものモノに対する意識やかかわり方について聞き取りを行う。

2) アンケート調査方法

- ・調査対象：沖縄県宮古島市立の小学校 1 校、全学年男女計 33 名を調査対象とした。
- ・調査期間：2015 年 2 月に質問紙配布を行い、2015 年 3 月に回収を終了した。
- ・調査方法：自記式質問紙調査を実施した。質問紙を学級担任により配布してもらい、児童の回答後回収する形式をとった。

調査内容を、「衣服への意識」「持ち物への意識」「身の回りのモノへの意識」の 3 項目に分けた。

3) アンケート調査結果

i 対象者の属性

調査対象者の性別の割合は、男子児童 45.5%。女子児童 47.2% であった。学年の割合は、低学年は 27.3%、中学年は 30.0%、高学年は 42.4% であった。

ii 衣服への意識

①衣服の選択習慣

毎日の衣服の選択について、「自分で選ぶ」「自分以外の家族が選ぶ」「家族と一緒に選ぶ」、の中から回答してもらった結果、「自分で選ぶ」とした児童の割合は、全体の 74% であった。「自分以外の家族と選ぶ」「家族と一緒に選ぶ」は、共に 13% であった。

また男女別の回答の割合は、男子で「自分で選ぶ」は 61%、「家族が選ぶ」は 31%、「家族と一緒に選ぶ」は 8% であった。女子で「自分で選ぶ」が 82%、「家族が選ぶ」が 0%、「家族と一緒に選ぶ」が 18% であった。この結果から、男子は衣服を自分で選択する機会が、女子よりも少ないといえる。一方で女子は、自分自身で選択にかかわる傾向が強いといえる。

②着用している衣服の選択方法

アンケート調査時に着ていた衣服の選択について、「自分で選んだ」「自分以外の家族が選んだ」「家族と一緒に選んだ」、の中から回答してもらった結果、「自分で選んだ」が 74%、「家族が選んだ」が 23%、「家族と一緒に選んだ」が 3% であった。

さらに衣服のアイテム別に、それぞれどのように選択したのか回答してもらった。選択肢を、「自分で選んだ」「家族が選んだ」「家族と一緒に選んだ」「覚えていない」の4つを設けた。

Tシャツ・ブラウスの選択方法では、「自分で選んだ」が75%。「家族と一緒に選んだ」が6%、「家族が選んだ」が19%、「覚えていない」が0%であった。

ジャンパー・パーカーなどの選択方法では、「自分で選んだ」が74%、「家族と一緒に選んだ」が10%、「家族が選んだ」が16%、「覚えていない」が0%であった。

ズボンの選択方法では、「自分で選んだ」が73%、「家族と一緒に選んだ」が6%、「家族が選んだ」が21%、「覚えていない」が0%であった。

靴下の選択方法では、「自分が選んだ」が82%、「家族と一緒に選んだ」が3%、「家族が選んだ」が15%、「覚えていない」が0%であった。

帽子的選択方法では、「自分で選んだ」「家族が選んだ」が共に25%、「覚えていない」が8%であった。

スカートの選択方法では、「自分で選んだ」「覚えていない」がそれぞれ50%で、「家族が選んだ」「家族と一緒に選んだ」は0%であった。

ワンピースの選択方法では、「自分で選んだ」が34%、「家族と一緒に選んだ」「覚えていない」が33%で、「家族が選んだ」は0%であった。

ヘアピンやヘアゴムの選択方法では、「自分で選んだ」が73%、「家族と一緒に選んだ」が13%、「家族が選んだ」「覚えていない」がともに7%であった。

アイテム別に、それぞれの選択方法について回答してもらった結果、「Tシャツ、ブラウス」「ジャンパー、パーカー、セーターなど」「ズボン」「靴下」の選択においては「覚えていない」とする児童がいなかったものの、「帽子」「スカート」「ワンピース」「ヘアピンやヘアゴム」では「覚えていない」と回答する児童がいた。このことから、自分がモノを身に着けた過程について、十分に認識していない実態があることがわかった。

③着用している衣服への意識

着用している衣服に対し、「とても気に入っている」「まあまあ気に入っている」「あまり気に入っていない」「気に入っていない」の4つのうちで最も当てはまると思う選択肢を選んでもらった。「とても気に入っている」が55%、「まあまあ気に入っている」が3%、「気に入っていない」が3%であった。「とても気に入っている」「まあまあ気に入っている」と回答した94%の児童が、自分が着用している衣服について好感をもっているといえる。

次に、「とても気に入っている」「まあまあ気に入っている」を選択した児童に、着用している衣服のうち、どの衣服を気に入っているのかについて複数回答してもらった。その選択肢は、「Tシャツ、ブラウス」「ジャンパー、パーカー、セーター」「ズボン」「くつ下」「ぼうし」「スカート」「ワンピース」「ヘアピン、ヘアゴム」とした。

男子の場合、気に入っている衣服として最も多く回答があったのは「Tシャツ、ブラウス」であった。続いて「ズボン」「靴下」「ジャンパー、パーカー、セーター」「靴下」「帽子」という結果となった。

女子の場合も同様に、「Tシャツ、ブラウス」が気に入っている衣服として多くの回答を集めた。その次に「ズボン」「ジャンパー、パーカー、セーター」「靴下」「スカート」と続いた。気に入っている「ヘアピン、ヘアゴム」に関する回答は、男子よりも多い。

④今欲しい衣服

今欲しいと思っている衣服があるか、またその内容はどのようなものかについて質問した。その回答内容を以下に示す。

<低学年男子>

緑の半袖 T シャツ、ゴールドの靴下（1 年男子）

金白のキングスのユニフォーム（2 年男子）

<中学年男子>

黒の服、キングス⁴のユニフォーム（3 年男子）

黒と白の靴下、白い長袖服（バスケット用）、赤・白・黒のズボン（4 年男子）

黒のバスパン⁵（4 年男子）

<高学年男子>

バスケの服（5 年男子）

こげ茶の T シャツ、バスケのデザインのズボン、ジャージ（5 年男子）

バスケのズボン（5 年男子）

<低学年女子>

リラックマ⁶の上着、リラックマのぼうし、リラックマの本バッグ（1 年女子）

こまさんとこまじろう⁷の洋服、こまさんとこまじろうのヘアピンやヘアゴム、じばにゃん⁸の傘、水色の洋服、黒と水色のジャンパー（2 年女子）

<中学年女子>

ロゴマークがついているパーカー（3 年女子）

金色のバスパン、キングスのユニフォーム、水玉模様のワンピース（3 年女子）

紫色の T シャツ、金色のバスパン、金色のキングスのバスパン（3 年女子）

赤色のバスパン（3 年女子）

バスケットの服（4 年女子）

<高学年女子>

デニムの短パン、スポーツの半袖服、ロゴ入りのパーカー（5 年女子）

ピンク色のセーター（5 年女子）

黒と白のボーダーワンピース（5 年女子）

スポーツで使うジャージ（アディダス⁹）（6 年女子）

袖丈の長いポリエステル 100% の半袖の T シャツ（6 年女子）

以上のように、欲しい衣服があるとし、またその内容について具体的なイメージをもつ児童が全体的に多く見受けられた。

男子の場合は、どのような衣服が欲しいかという質問に対して、「キングスのユニフォーム」、「バスケのデザインのズボン」といったような、主にスポーツや部活動を連想させる記述が多かった。このことから、男子児童の多くがスポーツに興味をもっていて、自身の生活の中に、スポーツに関連するモノを今よりも取り入れたいと思っていると考えることができる。学年ごとの違いは、あまり見受けられなかった。

一方で女子の場合は、欲しい衣服に対するイメージが学年ごとで異なっている。低学年女子は、「リラックマの上着」「こまさんとこまじろうの洋服」など、アニメのキャラクターに関する衣服に興味をもっていることがわかった。中学年女子は、男子児童と同様、スポーツ関連の衣服をあげることが多く、活発な印象を受けた。しかし「ロゴマークがついているパーカー」「水玉模様のワンピース」といったような、低学年にはみられなかったデザイン性を考慮した回答もみられた。高学年女子になると、「デニムの短パン」「袖丈の長いポリエステル 100% の半袖の T シャツ」などといった、衣服の素材やサイズにまで意識を向けた記述が目立った。これは、高学年からの家庭科授業において、児童が知識を取り入れた結果とも考えることができる。また「スポーツで使うジャージ（アディダス）」という回答もあり、ブランドに対する興味もうかがうことが

できる。

iii 持ち物への意識

①持ち物の選択方法

普段使用している持ち物を購入する際に、どのようにして選択したのかを「自分で選んだ」「家族と一緒に選んだ」「家族が選んだ」「覚えていない」、の4つの選択肢のうちから選んでもらった。持ち物の項目は、「鉛筆」「ペン」「消しゴム」「筆箱」「ランドセル」「かばん」の6種類とした。

鉛筆の選択方法では、「自分で選んだ」が56%、「家族と一緒に選んだ」が22%、「覚えていない」が9%であった。

ペンの選択方法では、「自分で選んだ」が67%、「家族と一緒に選んだ」が6%、「覚えていない」が12%であった。

消しゴムの選択方法では、「自分で選んだ」が70%、「家族と一緒に選んだ」が9%、「家族が選んだ」が15%、「覚えていない」が6%であった。

筆箱の選択方法では、「自分で選んだ」が64%、「家族と一緒に選んだ」が18%、「家族が選んだ」が15%、「覚えていない」が3%であった。

ランドセルの選択方法では、「自分で選んだ」が47%、「家族と一緒に選んだ」が31%、「家族が選んだ」が22%、「覚えていない」が0%であった。

かばんの選択方法では、「自分で選んだ」が55%、「家族と一緒に選んだ」が23%、「家族が選んだ」が19%、「覚えていない」が3%であった。

「自分で選んだ」とする割合が唯一半数に満たなかったのは、ランドセルの選択であった。ランドセルの購入には、家族が選択にかかわる場合が他の品目よりも多い。

「鉛筆」「ペン」「消しゴム」などの比較的小さく安価なモノに対しては、購入時の選択方法について「覚えていない」と回答する児童が多かった。これらのモノはまた、小さく安価であるということのほかにも、「かばん」や「ランドセル」などに比べて消費が速く、よく買い換えられるという特徴をもっている。児童は実際に、これらのモノを消費する経験を、他の品目よりも多くもっているといえよう。一般的に児童一人が1回しか購入した経験のないランドセルの選択方法について、「覚えていない」に回答する児童は一人もいなかった。このこともふまえて、人は繰り返し消費するという経験の中で、自分が持っている持ち物に対して明確な意識が薄れていくのではないかと推測することができる。消費する回数が多いモノへの意識は、消費する回数が少ないモノへの意識より低いといえる。

②使用している持ち物への意識

「鉛筆」「ペン」「消しゴム」「筆箱」「ランドセル」「かばん」の持ち物の中で、気に入っているモノについて複数回答してもらった。

男子では、持ち物の中で気に入っているモノの種類の数について、6種類全部気に入っているとした児童は53%であり、5種類と4種類は0%、3種類が13%、2種類が27%、1種類が7%であった。

女子では、持ち物の中で気に入っているモノの種類の数について、6種類全部気に入っているとした割合は17%であり、5種類が11%、4種類が28%、3種類が11%、2種類が28%、1種類が5%であった。

持ち物の中で気に入っているモノの種類の数について、男女で差がみられた。男子の場合、持ち物すべてを気に入っているとした児童の割合は、53%と半数以上に及んだ。これに対して、すべての持ち物を気に入っているとする女子の割合は2割に満たなかった。このことから、男子の方が自分の持ち物に対する満足度が高いといえる。

持ち物の中で気に入っていないモノの種類の数では、気に入っていないモノはないとする児童は49%であり、1種類と回答した児童が30%、2種類が12%、3種類が6%、4種類が3%、5種類と6種類はともに0%であった。

男子で、持ち物の中で気に入っていないモノの種類数は、気に入っていないモノはないとする児童が60%を占め、1種類が27%、2種類が0%、3種類が6%、4種類が7%、5種類と6種類は0%であった。

女子で、持ち物の中で気に入っていないモノの種類数は、気に入っていないモノはないとする児童が39%、1種類が33%、2種類が22%、3種類が6%、4・5・6種類はそれぞれ0%であった。

この質問に対して、男子児童の6割が、気に入っていないモノはないとしている。しかし気に入っているモノに関するアンケートでは、男子児童が持ち物すべてを気に入っているとする割合は約5割に留まっていて、気に入らないモノはないとする一方で、すべての持ち物を気に入っているとはしていない男子児童がいることがわかる。女子児童は、その傾向が男子児童よりも強く、気に入っていないモノがないとする割合が約4割であるのに対し、持ち物すべてを気に入っているとする割合は約2割となっている。このことから、女子児童にとって「気に入っている」にも「気に入っていない」にも属さないモノがあり、持ち物に対し、この2つ以外の認識も女子児童の中に存在しているということがわかった。

また全体でおよそ4割の児童が、自身が気に入っていないと思う持ち物を、普段の生活の中で使用しているということがわかった。

③今欲しい持ち物

今、欲しいと思っている持ち物があるか、またそれは何かについて質問した。

<低学年男子>

ようかいウォッチのカード（デュエル¹⁰）（1年）

新品のバスケットボール、強いデュエル（2年男子）

マリオ¹¹の鉛筆、スターウォーズ¹²の鉛筆（2年男子）

<中学年男子>

バスケットボール（4年男子）

ラジコンヘリ（4年男子）

<高学年男子>

バスケットボール（5年男子）

怪談話の本、黒い自転車（5年男子）

<低学年女子>

リラックマ¹³の鉛筆、ようかいウォッチの筆箱（1年女子）

マイメロ¹⁴のかばん、うさぎのかばん、くまの筆箱、ハートの鉛筆、リボンの消しゴム（2年女子）

<中学年女子>

水玉のペン、マイメロディーのかばん、キキとララの筆箱、いちごの絵が描いてある筆箱、ディズニーカークターのノート、いちごのハンカチ（3年）

かっこいい自転車、5mm方眼のノート、修正テープ、バスケットボール（4年女子）

<高学年女子>

室内用のバスケットボール（5年女子）

猫柄のペンケース（5年女子）

三味線のつめ、三線、そろばんのかばん（6年女子）

男子児童は、欲しい衣服と同様、欲しい持ち物についてもスポーツに関する記述が多かった。また低学年と中学年の男子には、「カード」「ラジコンヘリ」などといった遊びに関連するモノについての記述がみられた。

低学年および3年次の女子は、アニメのキャラクターの描かれているモノを欲しいとする児童が多かった。しかし4年生以降ではアニメのキャラクターに関する記述はあまりみられなかった。高学年女子は、「室内用のバスケットボール」「そろばんのかばん」などといったモノをあげていて、目的別に応じてモノを分けて使用したい傾向があるのではないかと考えた。

④持ち物の扱い方

自分の持ち物に対する扱い方について、「とても大切に扱っている」「まあまあ大切に扱っている」「あまり大切に扱っていない」「大切に扱っていない」、のうちから当てはまるものを選択してもらった。

自分の持ち物を「とても大切に扱っている」とした児童の割合は74%で、「まあまあ大切に扱っている」が23%、「大切に扱っていない」が0%であった。

自分の持ち物について、「とても大切に扱っている」「まあまあ大切に扱っている」と回答した児童は、合わせて97%であった。ほとんどの児童が自分の持ち物を大切に扱っていると認識していた。

iv 身の回りのモノへの意識

①身の回りのモノへの意識

児童が現在使用している机と椅子について、「使いやすい」「使いにくい」、のいずれかを回答させた。

身の回りのモノについて使いやすいと答えた児童が97%、使いにくいと答えた児童が3%であった。

学校生活で一番かわる身の回りのモノ（机・椅子）の使いやすさについて、ほとんどの児童が満足しているといえる。

②身の回りのモノの扱い方

身の回りのモノの扱い方について、「自分のモノよりも大切に扱っている」「自分のモノと同じくらい大切に扱っている」「自分のモノよりは大切に扱っていない」「大切に扱っていない」、の4つの選択肢の中から回答させた。

身の回りのモノを「自分のモノよりも大切に扱っている」とする児童の割合は10%で、「自分のモノと同じくらい大切に扱っている」とした児童の割合は78%であった。「自分のモノよりは大切に扱っていない」とした児童が9%、「大切に扱っていない」とした児童は3%であった。

身の回りのモノの扱い方について、「自分のモノと同じくらい大切に扱っている」とする児童が最も多く、自分の持ち物と身の回りのモノの扱い方に差をつけていなかった。しかし自分の持ち物を大切に扱っていると回答した児童の割合が97%であったのに対し、身の回りのモノを大切に扱っていると回答した児童の割合が88%と下がっていることから、全体的にみると、自分の持ち物の方を大切に扱う傾向がみられた。「自分のモノよりは大切に扱っていない」「大切に扱っていない」に回答したのは中学年と高学年の児童であり、このことから、中学生以降、自分の持ち物と身の回りのモノの扱い方に差をつけ始める傾向がみられるのではないかと推測することができる。

(2) 教師への聞き取り調査と結果

1) 小学校教諭への聞き取り調査方法

・調査日：2015年10月9日

・調査方法：アンケート調査に協力してもらった小学校教諭1名に、聞き取り調査を行った。

2) 聞き取り調査内容とその結果

子どものモノとのつきあい方から読み取られる情報があるか、またそれはどのような内容かということについて尋ねた。また子どもとモノとのつきあい方に対して感じるということについても尋ね、これらの質問から、子どもとモノとのつきあい方、モノを介したトラブル、現在の子どもと消費の関係などの実態について聞き取ることができた。また子どもと身の回りのモノとのかわりについて、教師の立場から感じることを述べてもらった。

i 子どものモノからわかること

○子どもが持っているモノからわかることはありますか？

5年生の男子をもった時にいつもどくろマークの洋服を着けている子がいた。この子はトレーナーもTシャツもズボンも靴下もどくろマークだから、「どくろが好きなの？」と私が男子に聞いたら、「お母さんが好き。自分は嫌い」と言っていた。親の趣味で着せ替えられていて、それに嫌って言えない。

○他の場面でも、あまり自分の気持ちを言えないですか？

うん。自分の言葉で伝えられない。

教師が男子児童の服装について質問したことがきっかけとなり、そこから男子児童の衣服に対する意識が明らかになっている。自分自身は気に入っていない衣服を着用しているということ、また、そのことを家族に言えないということが教師と児童の会話から読み取られる。この男子児童は、他の場面でも自分のことばで気持ちを伝えられないという面があるということから、モノに対するかわり方は、他の生活場面における態度とも関連するととらえることができる。このことは、モノが子ども理解の手段の一つとなり得ることを示しているのではないかと筆者は考える。児童が着用している衣服や持ち物に注目することが、児童のモノに対する意識や態度、人とのかわり方などについて把握することにつながると考えられる。

ii 子どものモノとのつきあい方

○子どもとモノとのつきあい方について何か感じることはありますか？

友だち同士でモノを持って来たりして、こっそり休み時間にキーホルダーとったりすることがある。(モノは)そういうトラブルが起こる原因になる。だから自分の持ち物に名前を書くように指導している。それから個人対個人の貸し借りはさせないようにしている。

○学年別での特徴・問題はありますか？

低学年は珍しいモノを自慢したいから、こっそり持って来てそれがなくなった時とかのトラブルがある。それから自分からモノをあげたのに明日になると返してってなることがある。高学年になったら持ち物に関するトラブルは落ち着く。

モノが原因で、子ども間で問題が起きる例について聞くことができた。モノを原因とした問題が低学年に多いということ、また高学年になるとそのような問題が落ち着く傾向にあることがわかった。モノに関する問題が起きないようにする対策として、「自分の持ち物に名前を書くように指導する」「個人対個人の貸し借りはさせないようにする」という指導があげられた。モノは、人間関係を築くコミュニケーションのきっかけとなることもあるが、反対に、問題の原因となり得ることもある。この点を考慮してモノの扱い方に対するルールを決めておくことも、より良い子どもとモノの関係をづくり出すことに役立つと考えることができる。

○モノの消費について

シューズなどはほぼインターネットで買っている。だから今は、買い物することに関して地域差はあまりみられないと感じる。

現在では、ネットショッピングという方法により、直接店に足を運ばなくても、インターネッ

ト上で買い物をして商品を手に入れることができる。児童も、普段の生活の中でネットショッピングを利用し、自分の持ち物を購入しているということがわかった。自分が住んでいる地域にあまり店がなくても、インターネットを通じて欲しいモノを手に入れることができるため、買い物の内容の、地域による差異はほとんどないと考えられる。児童がネットショッピングにより、衣服や持ち物を購入する機会は今後ますます増えるだろう。

○身の回りのモノに関して

掃除用具室のほうきが逆さまになっていたのが気になっていた子がいた。モノに対してこだわりが強い子もいる。水槽の音が気になる子もいる。

身の回りのモノに関して、不満や違和感をもちながら学校生活を送っている児童がいるということが、この聞き取り調査を通してわかった。教師は、児童の衣服や持ち物だけではなく、児童がかかわる身の回りのモノにも意識を向け、教室環境を整えていく必要があると考えた。そうすることにより、児童がモノに不満や違和感をもち要因を減らし、一人一人が心地よい学校生活を送るための手助けをすることができると考える。

IV 生活科教育への提案

日々の生活を送る中で、人とモノとの関係を決して切り離すことはできない。モノは常に人の近くに存在し、生活をかたちづくるための一つの重要な要素として人の暮らしの中に活きている。しかし人は、生活にかかわっているモノ一つ一つ丁寧に、意識的に向き合う機会は少ないであろう。モノがありふれる現代においては、ますますこのことが浮き彫りになってくる。人にとって、モノと意識的に向き合う経験が薄れていくことは、人は自己自身とモノとのかかわり方を見失うことにつながりかねないと、筆者は考える。モノを意識的にとらえ、モノが自身の生活に存在する意味を理解することによって、人は生活の中に、モノがもつはたらきを十分に活かすことができるのではないだろうか。

IIでは、現代の消費スタイルの特徴である「自由に選択する」という行為について考察した。現代では、この「自由に選択する」という行為が、モノに限らず多くの場面で求められている。たくさんの情報や選択肢の中から、自分で選ぶ力をもつことが必要とされる中で、その力を育む手段としてのモノのはたらきに注目することができる。自由に選択する条件について、①選択肢が複数あること、②選ぶ主体がいること（選ぶ主体とは、a.モノを自身の生活に取り込む本人であること、またb.その本人を含めた複数人）としたが、衣服の選択習慣のアンケート調査により、児童87%が、この条件に当てはまる自由な選択を日常的に行っているということが明らかとなった。毎日の衣服の選択方法において、「自分で選ぶ」「家族と一緒に選ぶ」とした児童は、自由であるための条件である②選ぶ主体がいるということ（選ぶ主体とは、a.モノを自身の生活に取り込む本人であること、またb.その本人を含めた複数人）を満たしていることととらえることができるので、自由な選択を行っていることととらえた。さらにa.とb.の主体それぞれの行動について考えてみると、「a.自分で選ぶ」は、自分の衣服を自分自身で選び身に着けるといふ点から、その行動が自律性の育成に役立ち、「b.家族と一緒に選ぶ」は、自分以外の人と一緒に衣服を選択するという点から、コミュニケーションの経験を生活の上で多く得られると考えることができる。習慣的なモノの選択が、こうして自律性やコミュニケーション能力の育成などにもはたらきかけるといえるのである。

衣服や持ち物について欲しいものがあるかというアンケートでは、子ども一人一人が求めているモノについて知ることができた。欲しいモノがあるということは、すなわち新しいモノを生活の中に取り入れたいとしている状態であるといえる。モノの消費を通して、自分の生活をさらに

良い方向へ動かしたいという気持ちが、子どもの中にはあり、モノは、消費されることによってその役割を果たすのである。また、子どもの欲しいモノからは、子どもが何に興味をもっているかということについて理解することができる。子どもがどのようなモノにかかわって生活していきたいかを知ることにより、学校生活の中にその要素を取り入れることもできる。このようにして子どもが欲しいモノに対する理解を通して、子どもの可能性を伸ばすきっかけをつくることもできると考える。

聞き取り調査では、教師が子どもの衣服をきっかけとして、それまで表に出てくることのなかった子どもの思いにたどり着いた例について示した。この例からわかることは、子どもが着用している衣服や持ち物に意識を向けることが、子どもの隠れた思いや見えない部分を引き出すための糸口として、有効にはたらくということである。モノ一つから、子どもの中にあるさまざまな思いを読み解くことができたという点において、子ども理解の手段としてのモノの可能性は大きいといえる。また、教室にある身の回りのモノに対して、不快感を感じる子どももいるということがわかった。このことから、教師は、子どもの身の回りのモノに対する反応やかかわり方についても注意深く観察し、それをもとに教室環境を整えていく必要があると考えた。

モノは、その使用目的に応じてのみ働くのではない。何度も選択されることにより、子どもの自律性の確立やコミュニケーションの経験に役立ったり、欲しいモノの対象とされることで、それが子ども理解につながったりもする。私たちは、生活を営んでいく上でモノに助けられ、より良い生活を目指す時、モノに支えられながら生きているのである。このことを意識してモノと向き合い、互いに良い関係を築くことが、生活を充実させるために必要なことであるといえる。

以上から、生活科教育において、子どものモノとのかかわり、モノそのものや消費にかかわる題材を取り上げることには、大きな意義があると考えられる。子どもとモノとのかかわりについて、生活科教育で取り上げるには、児童に消費経験をふり返ってもらい、その内容をまとめて検討したり、児童自身に自己の消費意識や、自己の衣服や持ち物、身の回りのモノについての意識について再認識してもらうなどの授業が考えられる。具体的な授業内容、授業の進め方について、今後検討していきたいと考えている。

なお、本稿は、2015 年度琉球大学教育学部学校教育教員養成課程教育実践学専修 4 年次、前里結子の卒業論文を修正・加筆したものである。本研究調査に協力をいただきました宮古島市立狩俣小学校の先生方、児童の皆様に、心から感謝を申し上げます。

〈引用・参考文献〉

- 浅野智彦 2002 年『図解・社会学のことがおもしろいほどわかる本』中経出版。
- 小林茂雄 1989 年「3.3 生活の表現へ」『表現としての被服』日本家政学会編、朝倉書店：162-179。
- ジェニファー・L・スコット 2014 年『フランス人は 10 着しか服を持たない』大和書房。
- 清水均編 2015 年『現代用語の基礎知識』自由国民社。
- 寺尾慎一編 2008 年『平成 20 年改定・小学校教育課程講座・生活』
- 富田守 1991 年「b. 生活文化とは（Ⅱ）」『生活文化論』日本家政学会編、朝倉書店：8-14。
- トマ・ピケティ 2014 年『21 世紀の資本』みすず書房。
- 文部科学省 2009 年『小学校学習指導要領』東京書籍。
- 養老孟司他 2004 年『せいかつ上・下』教育出版。
- 吉野正治 1991 年「11. 生活文化とは」『生活文化論』日本家政学会編、朝倉書店：1-8。
- 内閣府大臣官房政府公報室「国民生活に関する世論調査 2000・2006・2015」
<http://survey.gov-online.go.jp/index.html>。
- 文部科学省 2017 年『小学校学習指導要領』http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/

micro_detail_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf。

< 註 >

- 1 文部科学省 2017年『小学校学習指導要領』http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf。
- 2 本稿では、モノと表記して、それが含む意味について考察するため、「物」「もの」と区別する。
- 3 内閣府大臣官房政府広報室「国民生活に関する世論調査 2000・2006・2015」<http://survey.gov-online.go.jp/index.html>。
- 4 沖縄県をホームとするプロバスケットボールチーム「琉球ゴールデンキングス」の略称。
- 5 バスケットボール用のズボン。
- 6 くまのキャラクターの名前。テレビアニメ「ようかいウォッチ」に出てくるキャラクターの名前。
- 7 テレビアニメ「ようかいウォッチ」に出てくるキャラクターの名前。
- 8 テレビアニメ「ようかいウォッチ」に出てくるキャラクターの名前。
- 9 スポーツブランドの名前。
- 10 カードゲームのカード。
- 11 テレビゲームのキャラクターの名前。
- 12 映画のタイトル。
- 13 くまのキャラクターの名前。
- 14 マイメロディーというキャラクターの略称。